



無茶でわがままでいいかげん。こんなやつを円熟のギアが演じると、なぜか魅力的に映る。映画『ハンティング・パーティ』はシャンテシネ、新宿武蔵野館ほか全国公開中  
©2007 IM Filmproduktions GmbH All Rights Reserved.

## エレガンスの社会学

# その着まなしに理由アリ

文 中野香織

## 第16回

**ほ**

んのひと月ほど前、桜がはらはらと舞い散る哀しくも美しい光景をながめつつ、本欄で「カレセン」な男を讀えようと考えていた。枯れたおじさん専科、ということばの生みの親であるアスペクト編『カレセン』によれば、「自分の年齢を受け入れている(若ぶらない)」「金や女を深追いしない」「さりげなく物知り」な、枯れた男の魅力をたたえるおじさん。

ブルース・ウィリスのわび枯れ、ビル・マーレイのダメ枯れ、ジュレミー・アイアンの憂い枯れ、ジョン・マルコビッチのねっとり枯れ、トミー・リー・ジョーンズのがんこ枯れ…もう、よりどりみどりである。花びらが散り行くままの桜の老木のように、淡々と、時の流れに抗わずにたたずんでいる男というのは、たしかにたまらない魅力がある。

多くの女性が「わたしも実はカレセンで」とカミングアウトしはじめたのも、当然の流れに見える。ブランド物や貴金属で身を飾り、高級車を乗り回し、ざらざらと欲望むきだしの微不良中年男がモテるとされた時代もあったが(遠い目)、憶測するに、たとえほんとうにモテていたとしても、金のおいさを愛する女にモテていたのではないか。そういう女をターゲットにするのであれば、微不良路線はまちがっていないのかもしれない。

**し**

かるに、世の多くの堅気の女性がかんから求めているのはどうやら、ありのままの、自信のない自分を安心してゆだねられる男性だったようである。その需要に、カレセンがびたりと応えた。ブランドなんて武装せず、老いの現実と等身大に向き合い、性的な緊張をさほど強く感じさせない男…というのは、とりわけ現実疲れ心づいてのうらおいを求めた女にとって、一種の理想形に見える。ほんのりと哀しさをたたえ、ひとりでも満ち足りた枯れたおじさんであれば、ダメな自分を偽ることなくさらけ出すことができそう…そんな幻想を遊べるのが「カレセン」ワールドなのである。

ところが、ほんの2、3週間の間に、カレセンはあれよあれよとメジャーになった。それだけ需要が大きかったことの証でもあるが、これからは枯れ!とばかり、モテる枯れを具体的に指指する媒体がでてきたり、「やつぱり枯れていいんだ」と居直る枯れがでてきたりと、なんだか気持ちの悪い状況が生まれるにいたり、このあたりで枯れの暴走に釘をさしとくべきではないのか?と反カレセンの思いがむくむくと湧いてきた。週刊誌のお墨付きを得てどつかりと居直る主流の枯れなど、なんの魅力があるものか。

**そ**

こへ飛び込んできたのが、リチャード・ギア、58歳である。いまさら、ギア?と疑問を抱かれる方も多からう。70年代にセクシー&ハンサムなスターとしてデビューし、80年代には「アメリカン・ジゴロ」でアルマーニのイメージと一体となってエロくゴージャスな時代の寵児となり、90年代に「プリティ・ウーマン」でヒロインを最高に引き立てるすてきなおじさま「ギア様」

## 枯れない、リチャード・ギア

にシフトしてからは好感度を維持し続け、2000年代には『シカゴ』でトップダンスの腕前というか足前も披露する余裕を見せたりもしたが、なにやらヒューマンで受身な「いいひと」路線をゆるやかにキープしていくのかな…という風にも見えていた。

オフスクリーンでも、1993年に当時結婚していたシンディ・クロフォード(95年に離婚)とともに「世界一セクシーな男」(同誌)に選ばれたりしたが、そんなセクシー最盛期を過ぎた後には、西洋人には珍しい熱心な仏教信者として知られ、グレイ・ラマ14世を支援し、中国政府によるチベット民族迫害を非難したりと、「いいひと」な印象を与える活動が多く報じられていた。

**境**

のままロマンティック枯れの境地に向かうのかな…と思わせていたギアであったが「ハンティング・パーティ」で鮮やかなギアチエンジ(失礼?)を見せてくれたのである。いまや世間から忘れられた「元・花形」戦場リポーターというのがギアの役柄。「元・セクシースター」の彼のキャリアとつい重ねて見たくなる。この、どちらかといえば「いいひと」イメージに抗うようなアンチヒーローが、死の恐怖と隣りあわせの紛争地でアドレナリンを噴出させつつ、超大物にかけられた懸賞金を狙って、建前なんて知るかよとばかり、いかがわしく、せこく、意地きたなく、仲間を巻き込み、危険に向かって男全開で暴走するのである! テープで「TV」と貼っただけ、としか見えない生々しい「報道」ベストを着て戦地を走り回る、くわえたばこの「落ち目おやじ」ぶりが、

**ス**

クリーンの外も、還暦を前にしてへんに暴走きみ。昨年はいンドでのエイズ撲滅キャンペーンの際に、インド人女優の頬に壇上でキスして「公然わいせつ罪」に問われたりして。これは結局「チープなパブリシティ」として片付けられたが、インドには「悪名」を残すことになった。日本のエステサロン、「ダンディハウス」でも広告塔になつてはいるが、これにも一瞬、固まった(ダンディハウスさん、ごめんなさい)。広告といえは日本の大手自動車会社との契約が決まっていたのに、中国市場に売るのが反中国政府を表明しているギアはまずいだらう、ついでに「メーカ側」に直前キヤンセルされてもいる。暴走というか迷走している感じだが、そのおさまらない感じがまたたまらない。

やつぱり男は枯れたりなんぞせず、抗ってこそ華!と脂ぎるギアを讀えつつ、一見、反カレセンな脂ぎりを発見。女に媚びていないため、「素なその人が見える気がする」という点(幻想にせよ)。年を重ねることによる男の「進化」とは、素敵な「素」を開花させること、ということなのかもしれない。

## Kaori Nakano

服飾史家。4月より明治大学特任教授。ファッション文化史を講じる。UOMOが提唱するエレガンスを、毎回人物を切り口にしてわかりやすくひもときます。著書に「モードの方程式」(着るものがない!) (ともに新潮社)などがある。